

現職教員の音楽基礎力向上にむけた再教育の試み

池田京子 芸術教育講座

1 はじめに

平成12年7月31日(月)～8月2日(水)の3日間、平成12年度長野県教育職員免許法認定講習(講座名:ソルフェージュ)を長野県総合センター(塩尻市)で行なった。受講者のほとんどの目的はこの講習を受講し単位を取得することにより、小学校もしくは中学校の二種の免許を一種にすることである。大学によるこうした現職教員の再教育は、様々の形と目的で行なわれているが⁽¹⁾、この認定講習は毎年、各教科について集中講義の形で講座が開設されているものである。ソルフェージュの能力は、音楽科を担当する教師にとって、その指導能力を大きく左右し、これを避けて通ることはできないものであることから、ソルフェージュが教育職員免許法認定講習の科目の一つとなっている。

一般に音楽教育においては、知識の習得の他に、長期間にわたる基礎訓練の積み重ねが重要な部分を占めている。今回のソルフェージュも、基礎訓練をともなったものの一つである。一方、この講習は、3日間の集中講習という形式をとっているため、ソルフェージュのような科目には本来合わないものとするのが自然である。したがって、この講習形式とソルフェージュという内容の間にある隔たりを、現職教員の再教育という中でどのように埋めるかがこの講習を行なうに当たっての大きな課題であった。

本論文の目的は、受講生の能力背景に関するデータ調査にはじまり、それに基づいて作成された3日間の講習のカリキュラムとその実践法を通して、この隔たりをどのようにして埋めたかを示すことである。そしてこれらを通して、基礎訓練を伴った音楽教育における、現職教員の再教育の在り方の一つを提案することである。

本論文は次のように構成されている。まず第2節において、受講者の背景と能力の調査、及びその結果について述べる。第3節において、具体的な授業方法について説明する。第4節に、本講習のために作成したカリキュラムを示す。最後に、今回の講習から得られた知見を総括する。

2 受講者の背景と能力の調査

受講者は、欠席2名を除いて38名(男性9名、女性29名)であり、ほとんどが小学校及び中学校の現職教員からなっている。その内訳は、小学校(31名)、ろう・養護学校(4名)、中学校(3名)となっている。開講前に与えられた受講者についての具体的な情報はこれのみであった。このため、受講者の背景と能力について調査を行なう必要があり、後で述べるような、独自に作成した聴音テスト、自己プロフィール及びこの講習に期待するものを、自由に文章にして提出させることにより、受講者の状況を把握しようとした。

2.1 背景と意識の調査

受講者の背景と意識について知るために、任意に、自己プロフィール、この講習に期待するもの及び希望、出身学部・学科(大学名等の名称は不要)、現在の職(音楽専科、小学校の教師等)、コンピュータ利用の経験等を自由に書いてもらうという形の調査を行なった。また、受講後に、本講座についての感想(受講意義はあったか、講習改善のための率直な意見等)を自由に書いてもらい、受講前と受講後を比較できるようにした。比較結果を表1に示している。

この調査から、受講者は、中学の音楽教師(3名)、小学校で音楽の授業を担当している音楽専科の教師(8名)、その他は様々の専門教科をもっている教師であることがわかった。これらの音楽専科以外の教師のうち、音楽の授業を自分で担当している教師が15名、音楽

の授業を他の教師に依頼しているものが12名であった。この調査では、受講者の意識について結論的なことをいうことはできないが、受講者の感想(表1(左側))から、彼等の意識の一旦をうかがうことができる。また、コンピュータの利用経験については、ほとんどの教師が自信がなく、全く経験のないものが20名であった。

表1:【講習についての感想一覧】

受講者	受講前の感想	受講後の感想
1	何か、自分に今まででないものを身に付けられれば、と思っている。	繰り返しやっていくこと、その積み重ねがやがては、私のような力のない者にも、力になっていくのでは、と3日目終了時になり感じた。自分自身、普段の生活の中で聞く耳を育てることも、していきたい。
2	ついていけるか不安。	理解できる部分をきっかけに、何とかついていける部分があったところに、喜びを感じた。最後は、やり遂げたという充実感を味わうことができた。
3	高度な知識・技能を得ようとは考えていない。お気楽コースでお願いしたい。	はじめはビビったが、音楽の深さに触れられた。グループ活動が楽しかった。できない時の子どもの気持ちがよくわかった。
4	ついていけるか心配。	講義のはじめにくらべ、楽譜を書くのもおっくうでなくなった。3日間であらうから、これからの人生諦めることはないと思えてきた。
5	音楽は好きだが、楽譜にすることができない。	2日目になると、同じ聴音も落ち着いて聴けた。聴き取ることを積み重ねていけば、子ども達と一緒に育つことができるのではないかと思った。多くのことを得ることができた講習だった。
6	専門知識はないが、音楽は好きである。	毎朝ラの音をとることを教えていただいた。15年かけるつもりで、続けてみたい。
7	すぐ楽な講習にお願いしたい。	一人ずつ歌わされたらどうしようという心配は、始めの数分で吹っ飛んだ。とにかく楽しい3日間だった。初歩から高度な講義内容でよかった。聴音からコンピューターまで、大いに勉強させていただいた。充実した3日間で、宿題より身になった。
8	ソルフェージュは苦手。	ソフトを使ってからは、わかりやすくなった。発声練習はとても勉強になった。
9	基礎を勉強したい。	学校に戻って、すぐ子ども達に役立てられる発声のことや、ハーモニーづくりなど、基本をしっかり教えていただき、よかった。ふだん、このような充実した時間をとれないので、とても貴重な経験だった。
10	どんな講義でも、楽しみながら受けたい。	あつという間の3日間。パソコンを含め、盛りだくさんの内容で楽しかった。
11	音楽は楽しいと思えるような授業の、ヒントになるようなことを、1つでも教えてほしい。	先生の話し方や、指導がわかりやすく、とても楽しみながら学習できた。こういう音楽の授業なら、子ども達も音楽を楽しみ、大好きになると思った。紹介してもらった歌や、ボディーパーカッションなど、実際に子ども達とチャレンジしたいと思った。
12	大学で音楽を専攻したが、自分の耳が鈍っているのを痛感している。	学生にもどった気持ちで本当に集中して音に向かい、楽しく学習できた。講習で学んだ沢山のことを、学校で生かしていきたい。
13	音楽を教えるはいるが、たいした指導ができていないので、何とかしたいと思っている。	音符もわからないような私だったが、音楽を学んでいく足がかりを作れたような気がする。集中していたのか、時間がたつのが早かった。中身が濃く、充実した講習になった。学校の音楽の授業では、満足行く指導ができず、音楽から逃げがちになってしまうが、帰ったら楽しくやさしく教えてあげたい。
14	歌は好きだが、ピアノが弾けず、楽譜もあまり読めない。	リズム創作表現は、教室でもやれそうだと思う。もらった資料を休み明けから役立てていきたい。
15	音楽は好きだが、用語等を覚えるのは苦手。	歌あり、リコーダあり、リズムありで、楽しく受講できた。音楽ソフトのつかい方など、役立てたい。
16	音楽を学習することの楽しさを学びたい。	3日間で大いぶ聴き取れるようになってきた。この調子で訓練していけば、少しは重なった音も聴き取れるようになるかも、という希望が持てた。朝の教室でやってみたい曲を紹介してもらいありがたかった。正しい方法的支援があれば子ども達はずっと音、ハーモニーの美しさ、重ねる楽しさを知ることができるということを知ることができた。苦しいどころか、次々と新しい活動で、楽しい3日間だった。

受講者	受講前の感想	受講後の感想
17	最終日の午後は出られないが、独唱の指導もしてほしい。	(欠席)
18	楽しく3日間過ごしたい。	教材研究をたくさんしていただき、様々な方法・技術を教えていただいた。ソフトの紹介が参考になった。自分達で創りだす楽しさを実感した。たくさんいろいろな収穫のあった講習だった。
19	音楽は全くやったことがないので、お楽しみコースを希望。	一流の懐石料理はすべてのパーツが各々に一流だといいます。ソルフェージュの授業は真にそうした授業だった。それぞれの時間に密度があった。
20	リズム感覚が身につく授業や教材を教えてください。	初歩からお話してもらい、五線紙に書くことも少しずつなれてきた。楽しく、視野が広がったように思う。
21	昔習ったソルフェージュをどのくらい思い出せるか力試しをしたい。	グループ活動によって、人とのつながりができ、音楽にはこういう楽しさもあるんだ、と実感した。
22	全くわからない。3日間終えられるか不安。	最初は取れなかった聴音も、3日目には少し聞き取れるようになった。「もののけ姫」で、自分なりにハーモニーに参加でき楽しかった。小学生にもやらせてみたい。音楽を、これからの自分の人生に取り入れたい。
23	基礎の基礎から教えてください。ついていけないか不安。	発声や楽譜の仕組みなど、専門的なことを少しでも教えていただきありがたかった。小さい子どもへ教える時のこともまじえてくださり、よかった。あつという間の3日間だった。
24	実力をつけたい。	3日間の研修で、何か方向が見えた。基礎の大切さを実感した。
25	ソルフェージュは苦手。	音楽は、専門的にやっていくと難しい内容がたくさんあるが、それを知らなくてもそれなりに楽しめるという点が、いいなあと思っている。今回は、その両方の内容を体験できてよかった。
26	コンピューターが苦手。	子ども達と心で歌っていけるようにがんばりたい。
27	(欠席)	(欠席)
28	自分自身を深めたい。	思わぬ収穫がたくさんあった。音楽の視野が、ぐっと広がった。教師としての生き生きとした発声、視線など、教師の大きな見本を見せてもらった。
29	講義以外にも、実技や鑑賞なども取り入れてほしい。	超基礎的なことを初心に戻って勉強しようという気持ちで受講したが、蓋をあけてびっくり！とても有意義な3日間であった。子どもと早くやってみたい。
30	ドレミぐらいは読めるようになりたい。	音楽と体育は似ていると感じている。(リズムに乗ること、身体全体を使って表現すること、など)中学生に体育を大切に考えさせるのと同じくらい音楽も大切にさせていきたい。
31	ピアノ科で勉強してきたので、発声が悪い。ソルフェージュはあまり得意ではない。	CDを使つての聴音では、間違っている音に自分で気づける良さがあった。
32	今は音楽専科だが、学級担任をもちたい。	CDを使つての聴音は、自分のペースで音がとれ、リラックスできた。これらのソフトを使うと、子ども達も生き生きとできそうだ。
33	ついていけそうに思えず胃が痛く不安である。	コンピューターを使った練習、みんなとの声合わせ、グループでの創作など、楽しくできた。いただいた資料を早速、教室で使ってみたい。
34	(欠席)	(欠席)
35	音楽係として、校歌の伴奏をしている。	また音楽をやりたいという気持ちになった。子ども達にいろいろ試してみたくなった。
36	視唱が苦手。苦手な音楽を少しでも好きになりたい。	密度濃く勉強できた。引出しを多く持つことの大切さをあらためて振り返った。これからは色々な音に耳を傾け、音を楽しめるような先生になりたい。
37	足手まといの部類だが、まじめに取り組みたい。	能力別グループに分けられた時はショックだったが、グループ別に合った課題をこなし、基礎力をつけることがとても役に立った。3日間楽しく充実した。
38	合唱や発声について教えてください。	(欠席)
39	(無し)	コンピューターはいろいろな場面で、授業に取り入れられると思った。
40	音楽は苦手。子ども達に教える時に困っている。ピアノも弾けず、歌えない私が、どう教えていったらよいか、少しでも勉強したい。	ソルフェージュの授業を受け、こんな世界もあるのだ、と新しい世界に触れられたようで楽しかった。聴音では、音の上昇・下降や、ドの音も聞き分けられずショックだった。リズム打ちについては、いろんな方法があるのだと、楽しく感じた。中々自分の思うようにできず、できない子の気持ちがわかった。これらを今後、子どもたちのために生かしていきたい。

2.2 音楽基礎能力の調査

音楽基礎能力の調査のために聴音テストを行なった。聴音テストの対象者が、教師自身であることから、テストという圧迫感を与えないように十分に配慮した。具体的には、以下のようなメッセージ等を口頭で伝え、筆記による調査を行なった。

- 「これは試験ではありませんし、講習の成績に反映させるものでもありません。」
- 「できないときには、できないということを、ある意味で示してください。それによって3日間の授業レベル設定と聴音に関するグループ分けをします。」
- 「わからない人も諦めないで、わかるところまでを示してください。たとえば、ト音記号について、5線符のどこに書くべきかがわからなくても、そのイメージだけでも書いてください。メロディーがわからなくても、それが4分音符だとわかり、4分音符が書けるなら、それだけでも書いてください。」

聴音テストは、音楽の基礎能力を診ることができ、また楽典知識についてもわかるようなものを作成した。単旋律に関するもの2題、複旋律に関するもの1題、和声に関するもの2題、合計5題から成る聴音課題を独自に作成した。単旋律に関する課題の1題は、音階を含む4分音符だけで成立している非常に平易なメロディー聴音であり、もう1題は臨時記号と3連符を含む平易なものである。複旋律に関する課題は、4小節からなる平易なものである。和声に関する課題の1題は、基本3和音I、IV、Vの区別をするもので、もう1題は4小節からなるへ長調の4声体である。評価項目とその結果を表2に示す。

表2：【聴音による音楽能力の評価項目とその結果】

評価項目	○(人)	△(人)	×(人)
楽典に関する基礎知識（音部記号、大譜表、終止線など）	25	10	3
音符と休符の認識（4分音符、8分音符、休符など）	21	13	4
リズムと拍子の認識（付点音符、3連符を含むもの）	25	9	4
音の高さの認識	11	17	10
複旋律（2声部）	20	14	4
和音の区別（I、IV、Vの和音）	22	4	12
4声体（和声）	2	10	26

○：良くできる、△：少しできる、×：ほとんどできない

表2からわかるように、受講者の能力は様々であるが、この評価結果によりグループ分けをし、授業のレベルをこの時点で設定することができた。このレベルの多様性は事前に想定していたため、あらかじめいくつかのレベルにわたる複数の教材を用意していた。コンピュータを利用した教材を使うことにしていたため、この準備には、かなりの時間を要することになった。

十分に配慮したにもかかわらず、この意識調査・テストの直後、4～5人の教師が、本講習に対して、3日の間耐えられそうにないとの大きな不安を訴えてきたことから、受講者の意識をうかがうことができた。

3 授業方法

本講習のために、長野県総合センターでは、通常の音楽研修室とマルチメディア研修室を用いることができた。音楽研修室では、デスクオルガン（ヤマハDE-637S（アンサンブルオルガン））6台を用いることができた。これ1台で、6人がそれぞれ鍵盤とヘッドホーンを使用でき、ヘッドホーンをとおして全員が共通の音を聞くことができるシステムとなってい

る。また、マルチメディア研修室では、20台のコンピュータが利用でき、あらかじめ、ミュージカルプラン社のMUSIC PRO⁽²⁾と龍吟社製の聴音の教材ソフト⁽³⁾をインストールしておいた。

ソルフェージュの講習において、コンピュータを利用した聴音訓練をすることにした理由は次の2つである。

1. コンピュータを使うことにより、レベルに応じた個別の訓練が可能である。
2. 受講者が教師という社会人であることから、個人の立場に配慮でき、間違いをそのつど自分自身で確認しながら学習できる。

背景と意識に関する調査結果（表1）からもうかがえるように、講習に対する不安と諦めが受講者にあるが、これは当然のここのように思われる。特に、ソルフェージュの訓練は、幼児から何年もかけて行なうものであり、この3日間でその能力をつけることは、基本的に無理である。しかし現職教員の再教育という観点から、次の点に焦点を絞ることが有効であると考へた。そしてこの講習後、教育の現場に戻り、自らの力と意欲により、この能力を高めていくことができる糸口を作ることを目標とした。

1. なぜソルフェージュ能力が現場の音楽教育において必要であるかを理解させる。
2. 受講者一人一人に対して、自分に伸びる能力があることを体験させる。

ほとんどの受講者が10年以上の教師経験をもつ社会人ということがあらかじめわかっていたため、どのような授業形態がありうるかを考察し、次のような基本方針を立てた。

【授業の基本方針】

1. 受講者の背景と能力を調査する。
2. 聴音に関しては能力別のグループ分けをする。このグループ分けのもとで、グループ学習及びコンピュータを利用した個別学習を行なう。そして、そのための教材を多く用意する。
3. 視唱に関しては能力分けも個別指導もせず、「全員」で視唱訓練を行なう。その際、音程をとるための一般的原理についても解説する。そして、ソルフェージュ的な視唱訓練のみならず、歌唱に関する基礎的な指導を行なう。呼吸法、発声法、児童発声について、講義・実演・実習を行なう。
4. 受講者を常に能動的にさせ、いわゆる「寝かせる暇を与えない」ようにする。
5. 教師・社会人としての立場に配慮する。

グループ学習については、様々にその有効性と方法が論じられているが^{(4),(5)}、本講習におけるグループ分けは、以下のように行なった。

【グループ分けの方針】

1. 聴音は、能力別に6つの段階(A⁺, A, A⁻, B⁺, B⁻, C)に分けた。
2. 各グループに、独自に作成したメロディーの課題、複旋律の課題、和声の課題を毎時間用意した。
3. グループ学習は、音楽研修室にあるデスクオルガンを用い、ヘッドホーンをとおしてグループの全員が共通の音を聞きながら行なう。グループ内の一人が弾き、課題を演奏する。他は同時にそれを聴き取る。
4. グループCは、男性がほとんどであったので、女性をいれるのは避けた。これは、気恥ずかしさなどに配慮したものである。

今回の講習の対象者は現職教員であり、この点が通常の学校教育とは異なっている。つま

り、未知の可能性をもった若い人の教育ではなく、能力が分化した社会人に、もてる能力をもって理解できるように、再教育のカリキュラムを組む必要がある。第4節では、本節で考察した内容と基本方針に基づいて、各々の能力分化した人たちが楽しめて、かつ力をつけることができることを目指して作成したカリキュラムを示す。

4 カリキュラム

3日間のカリキュラムを以下に示す。これまでも述べたように、講習には音楽研修室とマルチメディア研修室を利用している。

【第一日目】

10:00～10:50 背景と意識の調査及び聴音テスト

- 第2.1節の調査内容による受講者の背景と意識調査。
- 第2.2節の調査内容による受講者の聴音テスト。正解を板書し、受講者に互いに採点させる。

10:50～11:00 休憩

11:00～11:50 視唱訓練

- 基礎的な楽典知識（音部記号、音名、音符と休符の長さなど）を解説。
- 基本的な呼吸法と発声法（立ち方、息の出し方・吸い方、声の出し方）。
- 課題は「はじめてのソルフェージュ3」（音程・視唱編）⁽⁶⁾を用いる（2度音程及び3度音程）。
- グループ学習における聴音課題の弾き方について説明。

11:50～13:00 休憩

13:00～13:50 コンピュータの使い方（マルチメディア研修室）

- ほとんどの受講者はコンピュータの利用に未熟なため、コンピュータの立ち上げ方、ソフトの使い方、終了の仕方、電源等について説明する。
- あらかじめ用意した和音(I, IV, V)の聴き分け方を指導する。

13:50～14:00 休憩

14:00～16:00 聴音のグループ学習と個別学習（その一）

- コンピュータ及びデスクオルガンの台数不足のため、受講者を2つのグループのに分けて、マルチメディア研修室と音楽研修室を交互に利用する。
- 自習形式で、適宜個別指導を行なう。
- 音楽研修室：グループの能力に応じた課題を与え、一人が弾き、他はヘッドホーンで聴き取る。
- マルチメディア研修室：あらかじめ用意しておいた課題の中から各個人にあった課題(CD)を選んで与え、個別学習を行なう。

【第二日目】

10:00～10:40 呼吸法と発声法の基礎訓練

- 子供にもそのまま適用できる教材として「ゆかいに歩けば」を使って、呼吸訓練と発声訓練を行なう。アンザッツを用いた発声法⁽⁷⁾に基づいて、Ha, Ti, Po等の子音と母音の組合せを使って、声をどこに当てるか等を指導する。
- 課題は「はじめてのソルフェージュ3」（音程・視唱編）⁽⁶⁾を用いる（4度音程及び5度音程）。
- カノンの曲（「こんにちはカノン」）を歌う。

10:40～10:50 休憩

10:50～11:10 音楽ソフトの使い方（マルチメディア研修室）

- あらかじめインストールしておいたMUSIC PRO⁽²⁾というソフトウェアについて、その使い方の説明する。
- 「アイアイ」を用いて、曲の入力課題について説明する。

11:10～12:00 聴音のグループ学習と個別学習（その二（1/2））

- 受講者を2つのグループに分けて、マルチメディア研修室と音楽研修室を交互に利用する。
- 自習形式で、適宜個別指導を行なう。
- マルチメディア研修室：和音の聴き比べ（I, IV, V）の課題による和声聴音訓練。楽譜入力（「アイアイ」）の体験。入力済みのところまでをプリントアウトさせる。
- 音楽研修室：単旋律聴音と複旋律聴音の課題を、一人が弾き、他はヘッドホーンで聴き取る。

12:00～13:00 休憩

13:00～13:50 聴音のグループ学習と個別学習（その二（2/2））

- 受講者を2つのグループに分けて、マルチメディア研修室と音楽研修室を交互に利用する。
- 自習形式で、適宜個別指導を行なう。
- マルチメディア研修室：和音の聴き比べ（I, IV, V）の課題による和声聴音訓練。楽譜入力（「アイアイ」）の体験。入力済みのところまでをプリントアウトさせる。
- 音楽研修室：単旋律聴音と複旋律聴音の課題を、一人が弾き、他はヘッドホーンで聴き取る。

13:50～14:00 休憩

14:00～14:50 二重唱の教材を用いた歌唱訓練

- 2声部の曲（「あかいやねの家」）を歌う。他声部を聴きながら、自分のパートを歌う（「小さな世界」）。
- リコーダの練習（リコーダの運指表による指位置の確認をする）。
- 「エーデルワイス」を教材にして、歌の二重唱をリコーダを含む三重唱（奏）へと発展させる。
- リズム聴音：4分の4拍子，2小節のリズム聴音をする。タイや休符を含むリズムなので，初心者が聴き取ることは難しい。音楽大学出身の2人が，書き取れた時点で正解発表をする。指導者がそのリズムに和声をつけ，メロディーをつけて演奏するに従って，これが「となりのトトロ」の曲であることを，受講者自身に発見させる（子供たちがこのような複雑なリズムを平気で歌っていることに驚く）。

14:50～15:00 休憩

15:00～16:00 リズム創作表現

- 「手拍子の花束」という子供のリズム創作表現（ボディーパーカッション）のビデオを見る（30分）。
- ビデオの基本リズムの再現体験を行なう（15分）。
- 音楽能力に関係なく4つの班にランダムに分ける（15分）。
- 最終発表会の課題（ボディーパーカッションによるリズム創作表現）を与える。

【第三日目】

10:00～10:50 視唱訓練

- 課題は「はじめてのソルフェージュ3」（音程・視唱編）⁽⁴⁾を用いる（6度音程，7度音程及び8度音程）。
- 「もののけ姫」を例として，子供の変声期においては，子供の音域にあわせて歌わせることが必要であることを説明する（移調奏及び移調視唱の必要性）。

10:50～11:00 休憩

11:00～12:00 オーケストラ曲の聴音

- ソプラノ譜表を使ったクレール読み体験。
- クラリネットA管の説明及び総合センター職員によるクラリネット演奏。
- モーツァルト「クラリネット協奏曲」の1フレーズを，クラリネットパートをブラインドにして穴埋めする聴音課題。
- メッツォソプラノ譜表を使ったクレール読み体験。
- ホルンF管の説明。
- ウェーバー「魔弾の射手」序曲のホルン四重奏に部分の1フレーズを，1パートブラインドにして穴埋めする聴音課題。
- 吹奏楽指導に際しては，A管やF管といった読み替え（クレール読み）の能力が必要であることを認識させる。

12:00～13:00 お昼休憩

13:00 ～ 13:30 聴音のグループ学習と個別学習（その三 (1/2)）

- 受講者を2つのグループのに分けて、マルチメディア研修室と音楽研修室を交互に利用する。
- 自習形式で、適宜個別指導を行なう。
- マルチメディア研修室：あらかじめ用意しておいた課題の中から各個人にあった課題 (CD) を選んで与え、個別学習を行なう。
- 音楽研修室：単旋律聴音と和声聴音の課題を、一人が弾き、他はヘッドホーンで聴き取る。

13:30 ～ 14:00 聴音のグループ学習と個別学習（その三 (2/2)）

- 受講者を2つのグループのに分けて、マルチメディア研修室と音楽研修室を交互に利用する。
- 自習形式で、適宜個別指導を行なう。
- マルチメディア研修室：あらかじめ用意しておいた課題の中から各個人にあった課題 (CD) を選んで与え、個別学習を行なう。
- 音楽研修室：単旋律聴音と和声聴音の課題を、一人が弾き、他はヘッドホーンで聴き取る。

14:00 ～ 14:10 休憩

14:10 ～ 15:30 発表会の練習

- 4班に分かれて、ボディーパーカッションによるリズム創作とその発表練習。

15:30 ～ 15:45 発表会

15:45 ～ 16:00 受講者による講習の評価

- 本講習を評価するために、講習の感想や今後の抱負、講習改善のための率直な意見などを、感想文の形で求めた。

16:00 ～ 講習担当者による演奏

- 「ありがとう、さよなら」の弾き歌いで終了。
- 本講習で学び経験したことを、今後さらに積み重ねていけるよう励めます。

5 まとめ

日々追われた暮らしの中で、潜在的には学ぶ姿勢のある教師達に、宿題等を課さず、3日間のその時間をより充実したものにする事によって、これから児童・生徒と一緒に、「力をつけていきたい」、「積み重ねていきたい」、と理解してもらうことを目標として、カリキュラムを組み実践した。講習後の感想文、講習時の自主的・積極的な様子、及び最終発表から、これらのことがほぼ達成できたのではないかと思われる。そして、本講習を通して、以下のような知見を得ることができた。

1. 本講習には、コンピュータを用いた聴音訓練を取り入れたが、これは本講習の目的を達成するために大きな効果があった。そして、音楽科教育において、コンピュータ利用は切り離せないものであり、さらに発展させなければならないものであることを深く認識した。

2. グループ学習の形態で指導を行なったが、これも多様な背景と能力をもった社会人教育には有効である。本講習では、創作リズム表現を最終発表の課題としたが、このためにグループ内では、音楽能力以外のそれぞれの個人のもつ能力が発揮され、授業時間外に特訓をするほどの熱意があった。音楽という素材が様々の軸でとらえられており、他教科との合科にもつながるものである。
3. 受講者の大半が、かなりの教師歴をもつ中堅教師であり、学ぶ姿勢を基本的にもっている。本講習では、確立された個人の人格を尊重することを基礎に置き、その立場で学習ができるように配慮した。コンピュータ利用はそのためにも有効であった。コンピュータを使い、個人の能力に合った聴音課題を用いることにより、他の受講者から隔離された形で学ぶ形態は効果的であった。また、音楽研修室における聴音のグループ学習では、グループ内のほぼ同じ能力の人を見ながら聴きながら、そして励ましあって学習することができ、これは大変効果があった。また視唱訓練は個別に行わず、あえて全員で行うことにより、過度な緊張を与えず、リラックスした体と自然な発声で行うことができた。これは、本講習の目的にとって、個々に正確な音程を求めることよりも重要であった。

以上総括すると、現職教員の音楽の再教育においては、通常の音楽の知識や訓練法に加えて、コンピュータ利用、グループ学習、及び社会人に対する配慮により、カリキュラムを作成することが肝要である。この考え方が、音楽の社会人教育のパラダイムに成り得るかを今後の実践の中で確かめていくことが課題である。

参考文献

- (1) 日本音楽教育学会編、「音楽教育学研究」、第3章、音楽之友社、2000.
- (2) MUSIC PRO、ミュージカルプラン社.
- (3) 白川雅樹、「受験生の聴音課題・初、中、上級」、龍吟社、1982.
- (4) イヴォンヌ・イーノック、「ピアノのグループレッスン」、野村幸治、小山郁之進共訳、音楽の友社、1984.
- (5) カワイ音楽教室本部、「音楽教育学」、カワイ楽譜、1967、
- (6) 「はじめてのソルフェージュ3」(音程・視唱編)、全音楽譜出版社.
- (7) Frederick Husler, *Singen – Die physische Natur des Stimmorganes –*, Kapitel 8 “Ansatz”, Schott, 1965.

(2001年5月24日 受理)